学校だより11月号　　令和４年１０月３１日

下和泉小だより

横浜市立下和泉小学校

児童支援専任　納屋　佳典

１０月から後期が始まりました。晩秋を迎え、木々も色づいています。登校時の子どもたちの様子も一か月前とは大きく変わり、少し厚手の上着を着てくる児童が増えました。季節の変わり目の時期ですので、児童も保護者の方々も体調を崩さぬようにどうぞご留意ください。

先月の学校だよりにて舩木校長から「誰一人取り残すことのない学び」の実現についてふれる一文がありました。下和泉小学校では、様々な面から子どもたちがより豊かに、今も将来も過ごせるように多面的・多角的な視点から支援を行っていけるように取り組んでいます。そのために、本校の重点目標である、「特別支援教育の充実」に向けて様々な状況に対応して支援ができるように努力しています。学習に不安がある、登校に不安がある、人間関係をもっと円滑にとれるようになりたい、など、児童の困り感を確認したうえで、保護者や児童と相談・検討し、子どもたちの成長につながるように支援を行っています。

現在の社会は多様性が浸透し、それぞれの価値観が尊重されます。その中で第四次産業革命が進み、社会も成長社会から成熟社会へ変化していくなど、これまでにないスピードで変わってきています。同様に教育も大きく変化してきています。これまでは学力に重きを置いた側面が大きかったですが、今後の社会の見通しが不透明な中でどのような力を育成していけばよいのか。

その変化の一つとして、今後は認知スキル（学力テストなどで測定できる力）を伸ばすことも必要ですが、非認知スキル（測定しづらい力）を伸ばすことに重要性がおかれ始めています。非認知スキルとは、様々なスキルがあげられますが、「自己肯定感」「自制心」「やり抜く力」などが代表的なスキルとしてあげられます。このようなスキルを育成することで、社会の変化にも対応できる子どもたちを育てていく必要があります。そのような力を伸ばしていくために、大人がどのようなことができるのか。普段からできることと言えば、子どもたちへの声かけがそれにあたります。

では、どのように声をかけていくかというと、「認める」声かけです。子どもたちは自分たちを認めてほしい、自分たちを気にかけてほしい、という思いが強いです。だからこそ、子どもたちに寄り添った声かけが重要になってきます。大人は「これくらいできるだろう」と思ってしまいがちですが、実際はまだまだ小さい子どもたち、難しいこともたくさんあります。大人の「これくらいは」ではなく、子どもたちの目線で考え、認めていく必要があります。その中でも、子どもたちの結果のみに重点をおくのではなく、プロセスや意欲などを認めることで、より「やり抜く力」などの非認知スキルが上がるといわれています。子どもたちにとって大人から認められる声をもらえることはとても大きなモチベーションにつながり、次も頑張ろうという意欲につながります。下和泉小学校では、こういった普段の声かけから意識して、子どもたちの様々なスキルを伸ばすように努めています。

このような支援をより効果的なものとして高めていくためには、学校だけでは子どもたちの力の育成には足りません。家庭・保護者の協力が不可欠です。ぜひ、家庭と学校が協力して子どもたちのより豊かな成長を意識して支援していければと思います。今後とも子どもたちへのご支援、どうぞよろしくお願いします。